

2010年度 エコノメトリックスII
& 上級エコノメトリックスII
第5回講義メモ (訂正版)

2010年10月29日

§ 3. 最小2乗推定量の性質

§ 3.1 統計量の基本概念

OLS 推定量など推定量は標本データ (y_1, \dots, y_n) の関数として表される。一般に標本データの関数 $T(\mathbf{y}) = T(y_1, \dots, y_n)$ を \mathbf{y} に基づく統計量と呼ぶ。

統計量に関しては次の十分統計量 (sufficient statistic) という概念が重要である。

定義 3.1.1

いま、 $y_i \sim i.i.d F(\theta)$, $(i = 1, \dots, n)$ $\theta \in \Theta$ とする。このとき、統計量 $T(\mathbf{y})$ がパラメータ θ の十分統計量であるとは T を条件としたときの $\mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n)'$ の条件付分布が θ に依存しないことである。

(例) 離散型確率変数の場合

$y_i \sim i.i.d. Bin(1, p)$ ($i = 1, \dots, n$) とする。このとき、 y_1, \dots, y_n の同時分布は

$$P(y_1, \dots, y_n) = \prod_{i=1}^n p^{y_i} (1-p)^{1-y_i}$$

で与えられる。

他方、 $x \equiv n\bar{y} = \sum y_i$ の分布は、 $x \sim Bin(n, p)$ より

$$P(x) = {}_n C_x p^x (1-p)^{n-x}$$

となる。よって

$$P(y_1, \dots, y_n | x) = \frac{1}{{}_n C_x}$$

が得られ、パラメータ p に依存しないことがわかる。ゆえに x (または \bar{y}) は p の十分統計量である。

定理 3.1.2 分解定理

y_1, \dots, y_n を確率変数とし、 $f(\mathbf{y}, \theta)$ を y_1, \dots, y_n の確率関数 (確率密度関数) とする。このとき $T(\mathbf{y}) = T(y_1, \dots, y_n)$ が θ の十分統計量であるための必要十分条件は、 θ を含まない \mathbf{y} の関数 $h(\mathbf{y})$ を用いて

$$f(\mathbf{y}, \theta) = g(T, \theta)h(\mathbf{y})$$

の形に分解できることである。

(例 1) 先程の $y_i \sim \text{Bin}(1, p)$ の例では $h(\mathbf{y}) = 1$ (または $1/n C_x$)。

(例 2) $y_i \sim i.i.d. \text{Poisson}(\lambda)$ ($i = 1, \dots, n$) とする。このとき

$$f(y_1, \dots, y_n, \lambda) = \prod_{i=1}^n \frac{\lambda^{y_i} e^{-\lambda}}{y_i!} = \frac{\lambda^{\sum y_i} e^{-n\lambda}}{\left(\prod_{i=1}^n (y_i!)\right)}$$

よって、 $\bar{y} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n y_i$ とすると

$$\begin{aligned} g(\bar{y}, \lambda) &= (\lambda^{\bar{y}} e^{-\lambda})^n \\ h(y_1, \dots, y_n) &= \left(\prod_{i=1}^n (y_i!)\right)^{-1} \end{aligned}$$

によって

$$f(y_1, \dots, y_n; \lambda) = g(\bar{y}, \lambda)h(y_1, \dots, y_n)$$

と表されるので、 \bar{y} は λ の十分統計量である。

十分統計量に関しては次の Rao=Blackwell 定理が重要な性質を与えている。

定理 3.1.3 Rao=Blackwell 定理

$\hat{\theta}(y)$ を θ の推定量とし、 $\theta^*(T)$ を十分統計量 $T = T(y)$ を条件としたときの $\hat{\theta}(y)$ の条件付期待値

$$\theta^*(T) = E[\hat{\theta}(y) | T]$$

とする。このとき平均 2 乗誤差

$$\text{MSE}(\hat{\theta}(y)) = E[(\hat{\theta}(y) - \theta)^2]$$

をリスク関数とすると

$$E[(\theta^*(T) - \theta)^2] \leq E[(\hat{\theta}(y) - \theta)^2]$$

であり、等号成立は

$$P(\hat{\theta}(y) = \theta^*(T)) = 1$$

のときのみである。

これより、 $\hat{\theta}(y) = \theta^*(T)$ のケースを除いて $\theta^*(T)$ は小さいリスクをもつことがいえる。また $\hat{\theta}(y)$ が不偏推定量であるときには平均 2 乗誤差は分散に等しくなるので、 $\theta^*(T)$ は最小分散を与えることになる。

§ 3.2 推定量の「良さ」とは

数理統計学では、推定量の「良さ」の基準として、以下の概念が用いられる。

定義 3.2.1

いま、 θ を $k \times 1$ のパラメータ (母数) ベクトル、 $\hat{\theta}_n$ をサンプルサイズ n の標本から求めた θ の推定量とする。このとき、不偏性 (unbiasness)、一致性 (consistency)、効率性 (efficiency) は次のように定義される。

- a). 不偏性 $E(\hat{\theta}_n) = \theta \quad \forall n$
- b). 一致性 $\text{plim}_{n \rightarrow \infty} \hat{\theta}_n = \theta$ (or $\lim_{n \rightarrow \infty} P(\|\hat{\theta}_n - \theta\| > \epsilon) = 0 \quad \forall \epsilon > 0$)
- c). 効率性 $\tilde{\Theta}$ を不偏推定量の集合とする。もし、 $\hat{\theta}_n \in \tilde{\Theta}$, $\tilde{\theta}_n \in \tilde{\Theta}$ であるとき、以下は同値。
 $\text{Var}(\hat{\theta}_n) \leq \text{Var}(\tilde{\theta}_n) \iff \hat{\theta}_n$ は効率性を有する。

β の OLS 推定量 $\hat{\beta}$ はこの 3 つの基準から「良い」推定量であることが言える。以下では、詳細に見てゆくことにしよう。

§ 3.3 不偏性

いま、攪乱項 u について、 $E(u | X) = 0$ を仮定する。OLS 推定量は、

$$\hat{\beta} = (X'X)^{-1} X'y = \beta + (X'X)^{-1} X'u$$

で与えられるから、

$$E(\hat{\beta} | X) = \beta + \underbrace{E((X'X)^{-1} X'u | X)}_0 = \beta$$

となり、不偏推定量であることが確認できる。

OLS 推定量 $\hat{\beta}$ が偏りのある推定量となるケース (biased case) として、説明変数に従属変数のラグを含む場合を挙げることができる。いま、モデルを

$$y_t = \beta_1 + \beta_2 y_{t-1} + u_t, \quad u_t \sim IID(0, \sigma^2) \quad (t = 1, \dots, n)$$

としよう。このとき、 $E(\mathbf{u} | \mathbf{y}_{-1}) = \mathbf{0}$ が成り立つだろうか。(ここで、 $\mathbf{y}_{-1} = (y_0, y_1, \dots, y_{n-1})'$ である。)

$$E(u_t | y_{t-1}) = E(u_t | \beta_1 + \beta_2 y_{t-2} + u_{t-1}) = 0$$

であるが、

$$E(u_{t-1} | y_{t-1}) = E(u_{t-1} | \beta_1 + \beta_2 y_{t-2} + u_{t-1}) = u_{t-1} \neq 0$$

になるため、

$$E(\mathbf{u} | \mathbf{y}_{-1}) \neq \mathbf{0}$$

が成立する。これより、 $E(\hat{\beta} | \mathbf{y}_{-1}) \neq \beta$ になる。

§ 3.4 一致性

次に、 $\hat{\beta}$ が一致推定量であることを確認しよう。 $\hat{\beta}$ がサンプルサイズ n からの推定量であることを強調するために、 $\hat{\beta}_n$ と表記しよう。

$$\hat{\beta}_n = \underbrace{\beta}_{const} + (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1} \mathbf{X}'\mathbf{u}$$

であるから、両辺の確率極限をとり、また

$$\begin{aligned} \text{plim}_{n \rightarrow \infty} A_n B_n &= \text{plim}_{n \rightarrow \infty} A_n \text{plim}_{n \rightarrow \infty} B_n \\ \text{plim}_{n \rightarrow \infty} \frac{A_n}{B_n} &= \frac{\text{plim}_{n \rightarrow \infty} A_n}{\text{plim}_{n \rightarrow \infty} B_n}, \quad \text{when } \text{plim}_{n \rightarrow \infty} B_n \neq 0 \end{aligned}$$

となることを用いると、

$$\begin{aligned} \text{plim}_{n \rightarrow \infty} \hat{\beta}_n &= \beta + \text{plim}_{n \rightarrow \infty} (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1} \mathbf{X}'\mathbf{u} \\ &= \beta + \left(\text{plim}_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \mathbf{X}'\mathbf{X} \right)^{-1} \times \text{plim}_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \mathbf{X}'\mathbf{u} \end{aligned}$$

になるが、

$$\text{plim}_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \mathbf{X}'\mathbf{X} = \underbrace{\mathbf{S}_{\mathbf{X}'\mathbf{X}}}_{\text{moment Matrix}} < +\infty$$

となることと、攪乱項に関する仮定 $E(\mathbf{u} | \mathbf{X}) = \mathbf{0}$ から、

$$\text{plim}_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \mathbf{X}'\mathbf{u} = \mathbf{0}$$

が成立するので、 $\text{plim}_{n \rightarrow \infty} (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1} \mathbf{X}'\mathbf{u} = \mathbf{0}$ になり、 $\text{plim}_{n \rightarrow \infty} \hat{\beta}_n = \beta$ が得られる。

§ 3.5 効率性

2 次形式 (quadratic form)

効率性は推定量の分散に関する概念である。 $\hat{\beta}$ の分散 (分散共分散行列) は正方行列であり、かつ対称行列になっている。

対称行列 A と $x \neq 0$ に対して、 $x'Ax$ を 2 次形式とよぶ。簡単な例をみてみよう。いま

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{12} & a_{22} \end{pmatrix}, \quad x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}$$

とする。

$$\begin{aligned} x'Ax &= \begin{pmatrix} x_1 & x_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{12} & a_{22} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 & a_{12}x_1 + a_{22}x_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} \\ &= a_{11}x_1^2 + a_{12}x_1x_2 + a_{12}x_1x_2 + a_{22}x_2^2 = a_{11}x_1^2 + 2a_{12}x_1x_2 + a_{22}x_2^2 \end{aligned}$$

このように、2 次形式は x の成分の 2 次式になっていることが分かる。

2 次形式の値によって対称行列 A の性質を以下のように分類することができる。

定義 3.5.1

いま A を $k \times k$ の実対称行列 (実数値を要素とする対称行列) とする。 $\forall x \neq 0$ について、

$x'Ax > 0$ ならば A は正値定符号 (positive definite) 行列であるという。

$x'Ax \geq 0$ ならば A は非負値定符号 (positive semi-definite) 行列であるという。

$x'Ax < 0$ ならば A は負値定符号 (negative definite) 行列であるという。

$x'Ax \leq 0$ ならば A は非正値定符号 (negative semi-definite) 行列であるという。

Note: 行列の固有値と 2 次形式の関係

結果のみ述べると、 $k \times k$ の実対称行列 A は適当な直交行列 Γ によって

$$A = \Gamma' \Lambda \Gamma = \Gamma' \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \lambda_2 & \cdots & 0 \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ 0 & \cdots & 0 & \lambda_k \end{pmatrix} \Gamma$$

に分解できる。ここで、 λ_i ($i = 1, \dots, k$) は A の固有値である。

いま、 A の固有値のうち、正の個数を ℓ 、負の個数を m とすると、

$$m = 0 \iff A \text{ は非負値定符号}$$

$$\ell = k \iff A \text{ は正値定符号}$$

という関係が成立する。

OLSE の分散

では、 $\hat{\beta}$ の条件付分散を考えよう。

$$\hat{\beta} = (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}\mathbf{X}'\mathbf{y} = \beta + (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}\mathbf{X}'\mathbf{u}$$

であるから、

$$\begin{aligned}\text{Var}(\hat{\beta} | \mathbf{X}) &= \text{E}\left[(\hat{\beta} - \beta)(\hat{\beta} - \beta)' | \mathbf{X}\right] \\ &= \text{E}\left[(\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}\mathbf{X}'\mathbf{u}\mathbf{u}'\mathbf{X}(\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1} | \mathbf{X}\right] \\ &= (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}\mathbf{X}'\underbrace{\text{E}(\mathbf{u}\mathbf{u}' | \mathbf{X})}_{\sigma^2\mathbf{I}}\mathbf{X}(\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1} \\ &= \sigma^2(\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}\end{aligned}$$

ところで、

$$\mathbf{X} = \begin{pmatrix} \mathbf{x}'_1 \\ \vdots \\ \mathbf{x}'_n \end{pmatrix}$$

であったから、

$$\mathbf{X}'\mathbf{X} = \sum_{t=1}^n \overset{k \times k}{\mathbf{x}_t} \overset{1 \times k}{\mathbf{x}'_t}$$

と表すことができる。これより

$$\mathbf{X}'\mathbf{X} \rightarrow \infty \quad \text{as } n \rightarrow \infty$$

であることは容易に分かる。すなわち $\mathbf{X}'\mathbf{X} = O_p(n)$ である。

したがって、

$$\frac{1}{n}\mathbf{X}'\mathbf{X} \rightarrow \mathbf{S}_{\mathbf{X}'\mathbf{X}} < \infty$$

が得られるので、

$$\text{Var}(\hat{\beta} | \mathbf{X}) = \frac{1}{n}\sigma^2 \times \left(\frac{1}{n}\mathbf{X}'\mathbf{X}\right)^{-1} = \frac{1}{n}\sigma^2 \mathbf{S}_{\mathbf{X}'\mathbf{X}}^{-1} \quad (3.5.1)$$

と表現できる。(3.4.1) 式より、 $\text{Var}(\hat{\beta} | \mathbf{X})$ が (1) サンプルサイズ n 、(2) 攪乱項の分散 σ^2 、(3) \mathbf{X} (non-stochastic の場合) または $\mathbf{S}_{\mathbf{X}'\mathbf{X}}$ (stochastic の場合) に依存することが分かる。

定理 3.5.2 Gauss=Markov 定理

β の OLS 推定量 $\hat{\beta}$ は線形不偏推定量の中で分散の下限になっている。

(証明のスケッチ)

β の線形不偏推定量を $\tilde{\beta}$ とする。 $\tilde{\beta}$ は線形推定量であるから、

$$\tilde{\beta} = \mathbf{Z}\mathbf{y}, \quad \text{where } \mathbf{Z} = (\mathbf{D} + (\mathbf{X}'\mathbf{X})^{-1}\mathbf{X}')$$

で表現できる。次に、 $\tilde{\beta}$ の期待値をとると、不偏推定量であるから、

$$E(\tilde{\beta}) = E(Dy) + E(\hat{\beta}) = \beta$$

が成立しなければならない。 $E(\hat{\beta}) = \beta$ であるので、

$$E(Dy) = E(DX)\beta + E(Du) = 0$$

を満たしている必要がある。したがって、 $DX = 0$ でなくてはならない。
この関係を使うと、

$$\begin{aligned}\tilde{\beta} - \beta &= Zy - \beta = Dy + (\hat{\beta} - \beta) \\ &= DX\beta + Du + (X'X)^{-1}X'u \\ &= Du + (X'X)^{-1}X'u\end{aligned}$$

になるので、 $\tilde{\beta}$ の分散は、

$$\begin{aligned}\text{Var}(\tilde{\beta} | D, X) &= E[(Du + (X'X)^{-1}X'u)(Du + (X'X)^{-1}X'u)' | DX] \\ &= \sigma^2(X'X)^{-1} + \sigma^2DD'\end{aligned}$$

として求められる。これより、 $\text{Var}(\tilde{\beta} | D, X)$ が最小となるのは $D = 0$ のときであることがわかる。

というのも、

$$D = \begin{pmatrix} d'_1 \\ \vdots \\ d'_n \end{pmatrix}$$

とおくと、 DD' の対角要素が、

$$(DD')_{ii} = d'_i d_i \geq 0$$

のように非負値を取るためである。 ■